



法の水茎

大正大学講師 高橋秀城 (63)

昨日こそ
早苗とりしか
いつの間に
稲葉そよぎて
秋風の吹く
（古今集）不知
（ついで）昨日、早苗を採って
田植えをしたのに、いつ
の間に稲の葉がそよぎよ
とそよぐ、秋風の吹く時
節になったのだらう
今年の夏は、梅雨明け

してから雨模様の日が続
きました。八月の東京で、
月初めから二十一日間連
続で降雨を観測するのは
四十年ぶりだそうで、天
候不順による夏作物の生
育が心配されます。実り
の秋の「五穀豊穡」を一
心に祈ります。
稲刈りの便りが届き始
める頃には、「後の彼岸」
とも呼ばれる「秋彼岸」



秋風に吹かれる稲穂

の一週間が巡ってきます。
昼と夜の長さが等しく、
あの世（彼岸）とこの世
（此岸）が近づくこの折
節に、お墓参りをして手
を合わせ、ご先祖様を偲
びます。

おほかたの
秋の気色は
そならぬに
見し世に似たる
夜半の月かな
（粟田口別当入道集）
（ほとんど）の秋の様子は
変わってしまったのに、こ
れまでと同じく照り輝い
ている夜更けの月よ
久しぶりに亡き人に語
りかければ、時の流れの
はやさに溜め息が出るか
もしれません。そんな時
夜空を見上げてみてはい
かがでしょうか。今年の
十五夜（仲秋の名月）は、
例年より少し遅めの十月
四日。あの日と変わらぬ
清かな月を眺めれば、揺
れる気持ちも次第に収ま
るでしょう。

仏教では、「心の動揺を
取り除き、安らかな迷い
のない境地に入ること」

を「正定」と言います。
密教には「月輪観」とい
う修行がありますが、自
分の心の中に清らかな満
月（仏様の姿）を観じる
のも、心を落ち着かせる
方法です。他にも「阿字
観」や「道場観」「日想観」
や「数息観」など、「観」
と付くさまざまな修行法
が説かれていて、
まず心を静めることが
幸せへの近道なのでしょう。
それは一箇所で観想（願
想）するだけではなく、
例えば、修験道で富士山に
登る修行を「富士禪定」
と呼ぶように、全身を使っ
て雑念を払い、心を一つに
集中していくことも含ま
れます。

たいと思ひ、楽器を手
に取れば音を出したいと思
います。盃を持てば酒を
思い浮かべ、サイコロを
手にすれば賭け事をしよ
うと思ひます。心は必ず、
物事に触れて動くのです。
ですから、仮初めにも良
くない遊びをしてはいけ
ません。

少しでもお経の一句を
見れば、何となく前後の
文句も見えるものです。
そのお陰で突然に、長年
の誤解を改めることもあ
ります。もし経典を開か
なかつたら、この間違い
には気づかなかつたでし
う。これは、触れたから
こそご利益なのです。

信心が起こらなくても、
仏の前に座って数珠を取
心のうちにも善い行いが
身につく、気持ちいが乱れ
ていても、僧侶の腰掛け
に座れば、いつの間にか
禪定（静寂の心境）に到
達するでしょう。

事理（現象と真理）は、
もともと別々のものでは
ありません。外見の姿が

折り折りの記 (97)

波多野 重雄

草を引き蟬の砦を見つけたら

日曜日の朝、庭隅の草を引いて驚いた。眼前に見事な蟬の抜け殻の砦が突然露出した。堅穴は整然とし、一種の芸術作品の様相を呈している。
蟬は数年から十数年間、地中で幼虫の生活を、草の葉の覆う日陰の土地に守られて送る。そして、泥のかたまりのような格好で這ひ出してきて木に登り殻が背中から割れて成虫となる。秋に入り、蟬法師蟬の鳴く声に一抹の季節の推移をおもふ。

（高尾山健康登山の会々々）

訪師子島

遊仏歯寺

初晴後雨聖湖上

初登深拝尊仏齒

仏齒在世三十二

明月隱雲輝仏齒

厚木市 荒井 一雄
上座部の
正統と絶ぐスリランカ
無数の白き仏塔ひかる
師子島を訪れて仏歯寺に遊ぶ
初め晴れ後に雨ふる、聖なる
初めて登山し深く拝す、
キャンデー湖畔…
尊き仏齒（釈尊の齒）を…
仏齒たるや世界に三十二齒しか
存在せず…
ボヤデー（満月の日）の名月は
雲に隠れ、光り輝くは仏齒のみ…

正しければ、心の悟りも
実現します。ですから形
だけであっても信仰心が
足りないと言っただけで
ありません。外見だけでは
敬つて尊ぶべきです。
（二五七段）

兼好は、形から入る
ことも一つの真理と述べ
ました。思えば、先月
号で取り上げた、お釈
迦様の弟子の周利槃特
も、はじめは掃除の真似
事から取りかかりました。
それはやがて、散らかっ
ていた心の塵を取り払う
善行にもつながっていつ
たのです。身も心もみる
みる浄められていく周利
槃特の姿に、周りの人々
も良い影響を受けていた
と思われまふ。

日々の生活に忙殺され
たら、散漫になりがちな
心を一つに集めてみては
いかがでしょうか。「大
切な何か」に目を向け、
実際に触れてみれば、こ
れまでとは違った安らぎ
の光景に出会えるかもし
れません。

雨を過ぎて松色を看



飯綱山火まつり 八月十日 於・信州飯綱山麓

山に随つて水源に到る。
溪花と禅意と、
相對して亦言を忘る。
（唐詩三百首 劉長卿）
（雨上がりの鮮やかな松
を見て、山道を分け入り
水源に到る。谷川の花と
静かな心持ちと、向かい
合えば満ち足りて言葉も
いらない）
「秋」は「飽き」（気持
ちが冷める）に通じるよ
うに、山の草木も心細さ
を抱くのでしようか。風
に揺らめき、少しずつ艶
やかな紅に染まりゆく
木々の葉は、むしろ秋の
訪れを喜んでいるかのよ
うです。満ち足りた「飽
き足る」。自然の中に身
置くと、いつしか私の身
体にも、心地良い秋の風
が吹き抜けていました。
（栃木北部教区普濟寺）